パロールからエクリチュールへの転回

―リクール解釈学の形成過程―

巻田悦郎

本稿はP・リクールの七〇年代解釈学の形成過程を、そのキー概念である「エクリチュール（écriture）」を手がかりとして追究することを目的とする。七〇年代のテキスト解釈学や聖書約解釈学において重要な役割を演ずることになるこの概念は、どのような影響関係の下で形成されてきたのであろうか。

論述は三つの段階を踏む。第一段階は、言語概念の用法と六八年までのエクリチュール概念（一）、第二段階は、六九年と七〇年におけるエクリチュールの概念とそれに対するデリダの影響（二）、第三段階は、七一年のおける意味論的自律の積極面の展開とこれに対するガダマーの影響である（三）。

一　エクリチュールの排除

a　エクチュールと言語

リクールにおいて言語を表す語としては、「言語（langage）」、「言葉（parole）」、「言述（discours）」、「国語（langue）」などがある。六〇年代前半期でよく使われるのは、このうち最初の三つである。次の文章は六〇年の『悪の象徴論』（SM）からの引用であるが、ここにはこの三語が同時に現れる。

「この情動的なトーンが言述（discours）による客観化を惹き起こすのである。告白はそれなしには自身の内に閉じてしまう情動を表現し、外に押し出す……。言語（langage）は情動の光である。告白によって過ちの意識は言葉（parole）の光の中に連れ込まれる。」（SM 14 f.）

もし三語が別のものを表していると考えるならば、この文章の意味を理解することができない。三語はほとんど重なり合っている。悪の経験は盲目で、恐れと情動に満ちている。この暗い経験が告白において言語的に表現されるのである。

同じことは六三年の「諸解釈学の葛藤」（CHE 168 f.）や六五年の『解釈について』（DI 23 f., 378）からも分かる。三者が互いに交換可能であれば、当然、「言語」と「言葉」、「言語」と「言述」、「言述」と「言葉」は交換可能である。事実、それを示すような文章をリクールに見いだすことができる。(1)

だが、三語のこのような重なりは、エクリチュールの排除を暗に含んでいないであろうか。「言葉（parole）」は、顕在的でないにしても、音声言語を意味している。そして、この語は「言語」や「言述」とともに言語一般を表しうるのである。エクリチュールは言語の一形式であるにもかかわらず、無視されている。

六〇年代後半になると、リクールは構造言語学の諸概念を自身の哲学の中に採り入れる。この結果、言語を表す諸概念の用法に少し変化が生ずる。六七年の「構造、語、出来事」（SME）では、言語（langage）はパロール（parole）ないし言述と、ラング（langue）とを包括する概念である。また、「言述」概念は「パロール」と同じものを指していることには変わりないが、バンヴェニストの影響で、積極的な意味合いを与えられた。言述は記号（signe）には還元できない文（phrase）を単位とし、思想（意味）と発話状況への関わり（指示）とを有する言語であって、構造言語学におけるパロール概念のような、言語からラングを差し引いた残余にすぎないものではない。

だが、ニュアンスの差こそあれ、言述（discours）概念はパロール概念とほぼ同義であった。このことは、リクールがこの二つの概念を自由に言い換えているところからわかる（SME 808. cf. PDS 29）。今挙げた論文の第二節の表題「言述としてのパロール」もまた、この同義性を示している。更に、六八年の「主体の問題」（QS）で、リクールは言語能力の行使を「ラングから言述への移行」と言い表している（QS 255, 256）。言述は構造（ラング）とは区別された発話（パロール）の出来事なのである（QS 250, SL 55）。

六七年前後におけるこのような諸概念の連関の中で、エクリチュールは、やはり、どんな役割も担っていないのである。これは、この時期までリクールはエクリチュール概念を排除ないし軽視し、言語全体を無意識的に音声言語（パロール）と同一視していたことを示唆する。ところが、七〇年代では言述はもはやパロールと一致しない。パロールは言述の一部分を表すにすぎない。これはエクリチュールが言述の一形式であることが承認されているからである。

「…話され、あるいは、書かれたあらゆる言述…」（CH6. cf. HIR 493）

言述概念のこうした変化はいかにして起きたのであろうか。エクリチュールはいかにして言述の一形式としての地位を確立したのであろうか。

b　六八年までのエクリチュール概念

「エクリチュール」が積極的な概念として現れるのは六九年になってからである。それ以前にも用いられていたが、重要な概念ではなく、主題的に取り上げられることはなかった。しかし、これはエクリチュールに対してリクールがいかなる評価も下していなかったということではない。

六五年の「解釈について』（DI）、でリクールは次のように述べている。

「書かれて読まれるが話されることのない論理記号に対して、本質的に口承に属し（oral）、そのつど遺産として受け取られ再び取り上げられる象徴系を、人間は対置するであろう。象徴によって語る人間はまずもって、語り手（récitant）である。」

(DI 56. cf SM 23f., SDP 66)

六〇年代前半期はリクールが言語の形式化・空虚化を批判していた時期である。従って、リクールが象徴と論理記号との関係をパロールとエクリチュールの関係に対応させたということは、彼がエクリチュールに対してパロールの側に立っていたことを意味する。

別の箇所では、次のようにエクリチュール概念が使われている。

「テキスト概念は、事実、類比的な意味で理解されうる。中世は「自然という書物」という隠喩を利用して、自然の解釈(interpretatio naturae)について語ることができた。この隠喩は、〈テキスト〉概念が〈エクリチュール〉概念をはみ出しているかぎりにおいて、釈義概念の可能な拡張を明らかにする。」(DI 33. cf. DI 34)

この引用では、エクリチュールは文字で書かれた具体的なテキスト、とりわけ、聖書を指している。テキスト概念はこれより意味が広いというのである。これは、リクールにおいて解釈の対象が個々の具体的なテキストには限定されず、テキストと見なしうるものすべてが解釈の対象だからである(DI 35)。

神学関係の論文では、聖書や世俗的文献を意味するものとして「エクリチュール」は頻繁に現れる。それは単に聖書のことを指していることが多い。このような用法はニュートラルで、ほとんどの場合、特に注目すべきものではない。ただし、リクールはエーベリンク論で「パロールは自身の解釈者である」という表現を「エクリチュールは自身の解釈者である」と言い換えている(GE 46)。この二つの表現は等価なのであり、エクリチュールとパロールの区別はここでは意味を成さない。

しかし、神学論文でニュートラルでない例というのも存在する。最初のパロール(キリストの出来事とその告知)は伝承過程において エクリチュール(新約聖書)となるが、このエクリチュールは説教や読書においてパロールに戻される。[2] リクールがこの過程を記述した部分には、エクリチュールがパロールの堕落であるという意味が込められていることが多い。解釈によって死んだエクリチュールから生き生きとしたパロール(ケリュグマ)が解放されなければならない、というわけである。

「死んだエクリチュールは生きた言葉として回復される。これはエクリチュールへと堕落した(tombé)ものをパロールへと定めるという考えである。」(RB 19)

「エーベリンクにおける言葉の出来事」(EPE)では、明確に、エクリチュールはパロールの堕落だとされている。

「歴史は絶えず、言語がそこで死ぬエクリチュールへのパロールの堕落(dégradation)、ないし失墜(chute)であった。」(EPE 30. cf. SL 54)

このことはエーベリンクの思想として述べられたことがあるが、[3] 同時にリクール自身の考えでもあった。別のところで述べたように、この時期、リクールはエーベリンクらの考えに立ってブルトマンを批判していた。また、六八年のある論文では、神学は言葉(パロール)の神学でなければならないと述べている(CRT 333)。

二　エクリチュール概念の独立

a　六九年――エクリチュールとパロールの対等化

六九年になると、前年までの用法とはうって異なり、エクリチュールは積極的な概念として現れ、言述概念はパロールとエクリチュールを包摂するものとしてその意味を拡張される。同時に「パロール」はエクリチュールと対比されることによって、音声言語という意味を明確にする。

六九年のシンポジウムの総括である「結論の粗描」(ECE)で、リクールはエクリチュールとパロールは言述の二つの実現形式であると述べている(ECE 289)。エクリチュールはもはや無視されたり蔑視されたりされず、パロールとは区別された言述の独自の実現形式として承認される。

同じ六九年に「哲学と言語」(PLK)という、現代の言語論を概観した論文が発表される。リクール自身の主張は極力抑えられているので、そこで述べられていることを直ちに、リクールの見解と見なすことはできないが、「結論の粗描」(ECE)と同様、彼がエクリチュールを積極的なものとして評価し始めたことを読み取ることができる。

エクリチュールに関して重要なのは、リクールがこの論文でデリダとガダマーに言及していることである。デリダに関しては、「「テキスト」の考察は、意味ある声(*voix signifiant*)としてのパロールとは区別された機能を、エクリチュールのために探究するように導く」(PLK 294)とあり、デリダの著作が挙げられている。「「テキスト」の考察」というのは翌年発表される「テキストとは何か」(QT)として具体化されるところのものだと考えられる。この論文において、テキスト概念はパロールから区別されたエクリチュールによって基礎づけられるようになる。テキスト理解はエクリチュールの次元にあり、パロールの次元にある対話とは区別されなければならない。

ガダマーに言及している箇所によると(PLK 290)、ガダマーでは、書かれたもの(écrit)は優れて距離化の道具であり、この距離化は今度は意味の再同化を要求する。これゆえに、書かれたものは解釈学の優れた対象である。

これは「エクリチュールに堕落したパロールの回復」というのとは対照的な了解概念である。

b　七〇年――エクリチュール論の開始

七〇年に「解釈学の現在的諸問題」(PI)、「テキストとは何か」(QT)という二つの論文が発表される。P・ケンプは後者に対するガダマーとエーベリンクの影響を示唆しているが[4]、むしろ、ガダマーの影響が本格的に始まるのは七一年からで、七〇年のこの二つの論文はデリダの影響の方が強い。

この二論文のエクリチュール論を見ておこう。

言述はまず話されてから、次に書かれるので、エクリチュールはパロールに対して副次的、人為的なものと考えられてきた。西洋では文字と言えば表音文字であったから、エクリチュールはパロールにその固定以外の何ものをも付け加えないという信念はますます強められた(QT 182)。しかし、エクリチュールは我々と言述との関係を根本的に変えた。エクリチュールは既に生じているパロールを後から記すためのものであるだけでなく、パロールを介さずに直

接、言述の意味を記すものでもある。エクリチュールはパロールと相並ぶ言述の実現形式なのである（PI 181f., QT 181f.）。

エクリチュールがパロールとは独立した言述形式であるなら、〈書く＝読む〉の関係は〈話す＝聞く〉の関係には還元されない。対話では対話者の間に相互性が存在するが、テキスト解釈では著者は読者に答えない。エクリチュールにおいて読者は不在であり、レクチュールにおいて著者は不在である。テキストを読むとはそれを遺著と見なすことである。著者が死んで初めて読者のテキストとの関係は完成される（PI 169f., QT 182f.）。

エクリチュールによって変容するのは言述と主観性（著者、読者）の関係だけではない。言述と世界（現実）の関係もまた根本的に変わる。対話においては対話者はある状況を共有し、この状況は指示詞（「あれ」「これ」など）によって指し示すことができる。テキスト解釈では主観性（著者）だけでなく、状況もまた失われる。テキストは他のテキストと関係づけられて、内的、文学的世界を構成する。それは準-世界（quasi-monde）という新しい関係体系の中に入るのである。

c　デリダとの関係

エクリチュールをパロールの単なる固定、堕落と見なす通念に対する批判[5]や、この伝統と表音的文字体系との共犯関係[6]、エクリチュールに対するパロールの歴史的・個体発生的な先行性に関する議論[7]、エクリチュールにおける主体の不在・作者の死[8]、といった観念はデリダの影響なしには考えられない。デリダは一九六七年に『声と現象』、『グラマトロジーについて』、『エクリチュールと差異』の三つの著作[9]を公刊する。これらの著作は直ちに広範な影響を及ぼし始めたが、リクールもまたこの影響史の外にいることはできなかった。

確かに、リクールはこの二つの論文ではデリダの名を挙げていない。彼が言及しているのはA・ルロワ＝グーランだけである（PI 168）。しかし、デリダは『グラマトロジーについて』の第一部が六五・六年の『クリティーク』誌に載った彼の論文を、ルロワ＝グーランの著書によって発展させたものであることを認めている[10]し、実際に、第一部でルロワ＝グーランの見解を引きつつ議論を行っているのである[11]。リクールがルロワ＝グーランに言及したのは、デリダからの直接の刺激か、あるいはデリダを巡って当時起きた議論の影響である。

デリダによると[12]、存在を現前性として解釈する形而上学の伝統は、常にエクリチュールを、主体が目の前に生き生きと現前しているパロールに対して貶めてきた。主体から隔たったエクリチュールは、充実したパロールの代理にすぎないものであり、外面的で疎遠なものである。西欧における表音文字の優勢はこの傾向を温存する場となった。表音文字大系では、エクリチュールはパロールを表すことに奉仕するものでしかないのである[13]。

しかし、デリダの意図はパロールに対してエクリチュールを復権することにあったのではない。むしろ、パロールとエクリチュールの対立を可能にしているようなエクリチュール、原エクリチュール（archi-écriture）を暴くことである。原エクリチュールは主体への現実の直接的現前を絶えず延期する差延（différance）である。この差延としてのエクリチュールによって何か本原的なもの、同一

的なもの、実体的なものは解体されてしまう。[14] この意味でのエクリチュールは、パロールと並ぶ一つの言述形式では決してない。[15]

リクールのエクリチュール論はデリダのこの議論と比べるとはるかに穏当なものである。リクールはデリダから刺激を受けたが、それはあくまで刺激にすぎなかった。彼は自身の哲学の枠組みに入ってくるかぎりでのデリダしか受け入れなかったのである。リクールの言うエクリチュールは、あくまで通常のエクリチュールであり、エクリチュールとパロールはラングから区別された言述に属す。リクールの議論には原エクリチュールに対応するものもない。彼は現前の形而上学に対する批判というハイデガー的企図をそもそも持たないのである（cf. MV 395）。

六九年の「結論の粗描」（ECE）で、リクールはデリダの名前を出さずに彼を批判している。それによると、デリダはエクリチュールとパロールが言述の実現形式にすぎないことを忘れて、エクリチュールの問題をラングの問題を直接結びつけた。記号論／意味論というバンヴェスト的区別（ECE 289）に立っていたリクールにとって、エクリチュールと能記（意味するもの）を同じレベルで扱おうとするデリダの議論は、乱暴に見えたのであろう。デリダは記号論に属する能記と意味論に属するエクリチュールを同列に扱っているというわけである。

デリダのエクリチュールはいわゆるエクリチュールでないのだから、この批判は当っていないことは明白である。[16] デリダにおいては、能記もいわゆるエクリチュールも、意味の同一性を延期するものとして機能する。[17]

三　エクリチュールの積極面

a　七一年――テキストの意味論的自律

七一年に「出来事と意味」（ES）、「言述における出来事と意味」（ESD）、「テキスト・モデル」（MT）、「聖書釈義における諸方法の葛藤から収斂へ」（CCM）といった、同じ傾向を持った一連の論文が発表される。我々はこれらをもってテキスト解釈学は完成されたと見る。エクリチュールの意味論的自律の思想は分節され、また、後に「テキスト世界（monde du texte）」と呼ばれることになる概念も現れる。

六〇年代前半期には、[18]「自己了解」が「存在了解」が対になるのと対応して、「テキスト（記号）了解」は「他者了解」と対になって、つまり、同一レベルで現れることが多い。他者と、テキストないし記号との区別はあまり重要ではないのである（EH 44. ST 23f.）。これはこの時期、テキストの意味が著者の意図から自律するという意味論的自律の考えがリクールにまだ存在しなかったことを示す。

六八年になると、リクールは意味論的自律の思想の原型となる考えを展開し始める。ブルトマン論では、解釈は著者を理解することではなく、テキストの意味に服従することであるとされている（PB 389）。六九年の「結論の粗描」（ECE）では、「無垢な方法はなく、あらゆる方法は意味理論を前提している」という理由から、リクールは「テキストを了解するとは著者の意図を求めることである」という主張を方法論的に素朴なものとして退けている（ECE 258）。著者や起源（source）と読者の間には「言語とは何か」、「テキスト

とは何か」、「エクリチュールとは何か」といった諸問題が介在しているのである。

しかし、この段階では意味論的自律の思想は特にエクリチュール概念によって基礎づけられていなかった。七〇年では、エクリチュールからの基礎づけは始まっているものの、意味論的自律の消極的側面が主に主張されていた。すなわち、エクリチュールは著者、および対話的状況を失っているのである。その積極的側面については、エクリチュールは言述を保存し、分折的な翻訳を可能にして言述の効力を増大させると言われているだけである(QT 183)。[19]

七一年になると、著者の死とか遺著とかいった極端なことは言われなくなる。対話では話し手の意図と言語の意味とは一致しているが、パロールが書き留められると、両者は別の運命をたどり始める。著者が死んだということではなく、ただ著者とテキストの関係がエクリチュールによって複雑化しただけである。エクリチュールはもはや著者の強調や身ぶりによっては助けられないという意味で、テキストはその物質性にもかかわらず、精神性を有する。著者の意図から分離した代わりに、エクリチュールは精神性を獲得するのである。

同様にして、テキストはそれが産出された状況を失うが、それによって世界を獲得する。対話では言述が差し向けられている現実は対話者がその中にいる状況である。言述が書き記されると、この状況は状況としては失われるが、可能的な世界、世界内存在の新しい次元として再獲得される。これが状況(situation)と区別された意味での世界(monde)である。世界は状況の可視性と限定性から解放されているという点で、精神性を有する。言述の宛先も、書き込みによって、現前する特定の対話者から、文字を読みうるすべての者に拡張され、潜在化され、精神化される。

b　ガダマーの影響

七一年の理論の形成に当たってリクールに大きな影響を及ぼしたと見られるのは、H-G・ガダマーであった。ガダマーとリクールの間には依然として抜き難い相違があることも確かであるが、[20] ガダマーの影響はデリダの影響に比べると実質的なものであった。

ガダマーの主著『真理と方法』は一九六〇年に発刊される。六五年の「実存と解釈学」(EH)でリクールは、真理と方法を分離しようとする試みに抵抗しなければならないと言っている(EH38, 39)。これは勿論、ガダマーの主著のタイトルに当てつけたものである。六六年のリクールの論文にガダマーの名が現れるが(PLC 28)、最初の実質的な言及は六九年の「哲学と言語」(PLK)であった。「テキストとは何か」(QT)は、ガダマー記念論文集への寄稿であり、七一年の「テキスト・モデル」は七一年に行われたガダマー会議での講演である。[21] ルーヴァン大学で七一年から七二年にかけて行われた『解釈学講義』(CH)では、ガダマーはディルタイの批判者として現れ、七三年の「解釈学の課題」(TH)ではガダマーの思想が独立した形で考察されている。

ガダマーが書記性(Schriftlichkeit)について語っているのは、『真理と方法』の第三部第一章である。議論の流れから考えて書記性(エクリチュール)はそれほど重要な位置を占めているわけではない。それは伝承の言語性をより明瞭に示すための手段にすぎない。

それにもかかわらず、デリダから刺激を受け、エクリチュールに注目していたリクールの眼には、書記性に関するガダマーの議論は意味あるものと映ったに違いない。実際、その章のa節「解釈学的対象の規定としての言語性」には、リクールがガダマーから受け取ったと思われる多くの洞察、表現を見つけることができる。

その第一は、エクリチュールがパロールには還元できないものであること、エクリチュールがパロールの単なる固定やパロールへの付加ではないことである。

ガダマー「書記性は音声伝承の継続になんら変化を及ぼさない単なる偶然……ないし単なる付加、ではない。」(367)

リクール「エクリチュールは単にパロールを刻印するためにパロールに付け加えられた何かではない。」(PI 169)

エクリチュールがパロールには還元できないという思想の重要な帰結が、テキストの意味論的自律の概念である。テキストの意味はテキストの書記性ゆえに、著者の意図や原読者の読みから自律する。テキストの「意味論的自律(semantic antonomy)」という用語そのものはE・D・ハーシュのものである。ハーシュはガダマーを含めた自身の対立者の思想をこの語で指し示そうとした。[22] しかし、意味論的自律の内容に関していえば、リクールはガダマーの思想を受け継いだのである。この思想を表している言葉を示そう。

ガダマー「原読者や著者の意図を持ち出すことは、非常に未熟な歴史・解釈学的規範を表しているように思われる。テキストの意味地平はそれらによって実際に制限されてはならない。文字によって書かれたものはその起源や著者の偶然性から切り離され、新しい関連性に積極的に開かれる。」(399. cf. 295 f.)

リクール「エクリチュールによって言述の意味は話し手から離れる。生きるパロールにおいては言述が意味していることと話し手が(意味する意図という意味で)意味していることとは重なっているが、エクリチュールでは言語的意味と話し手の意図は分かれる。」(CCM 48)

テキストはそれが最初宛てられた読者から自律し、文字を読みうる人すべてに聞かれる。これについてはリクール自身、ガダマーに負っていることを認めている。

ガダマー「文字に書かれたものは、読むことを知っている者はだれでも等しくこの領域に参与している意味の領域に、いわば会然と高められる。」(369. cf. 393)

リクール「言述の名宛人はもはや指し示すことのできるような誰かではない。エクリチュールによって他者は潜在化される。書かれたものは読むことを知っている者すべて(ガダマー)に宛てられている。」(CH31)

テキストの意味が著者の意図に還元されないのだとすれば、了解の対象は著者の心性や時代環境ではなく、テキストの内容でなければならない。テキストの内容はガダマーでは「事柄(Sache)」、「意味(Sinn)」、リクールでは「世界(monde)」である。

ガダマー「読みつつ了解することは、過ぎ去ったものを反復することではなく、現前する意味に参与することである。」(396. cf. 364, 395, 398)

リクール「言述において、テキストにおいて了解されるべきは、

まずもってそこに自己を表現し、いわばテキストの背後に隠された主観ではなく、テキストがいわばその前に展開した世界である。」(PLR 462f.)

こうした主張は、了解の目的をテキストの著者の心的生の把握に求めたロマン主義解釈学に対する批判としてなされている。リクールの六〇年代の解釈学は独自な解釈学であって、単純にロマン主義解釈学に属するものではなかったが、しかし、この解釈学を特に批判していたわけでもなかった。七〇年代におけるリクールのロマン主義解釈学批判はガダマーから受容されたものなのである。

エクリチュールは著者や原読者から自律するが、その代償として精神性(spiritualité)を獲得する。ガダマーもまた、テキストのエクリチュールの精神性(Geistigkeit)について述べている。読者の普遍性の場合と同様、ここでもリクールはガダマーに言及している。

ガダマー「書記性においては言語はその真の精神性を獲得する。というのも、文字伝承に対して了解者の意識はその十全な自律性を獲得するからである。この意識はその存在において何ものにも依存しない。従って、読者の意識はその歴史を潜在的に所有している。……この意識は必然的に歴史的で、歴史的伝承と自由に伝達しあう意識なのである。」(394 f. cf.169, 393 f.)

リクール「言述は物質的なものに受け入れられることによって、言述の精神性(ガダマー)と呼びうるものが保証される。……エクリチュールによって括弧にいられたものは、話し手の身体、肉と骨としての自己である。話された言述では、私が述べることは表情や身ぶりによって、短く言えば、身体によって支えられている。身体こそがエクリチュールによって抑圧されるのである。というのも、まさに、物質から純化された意味が、意志や書物などの物質的なものに委ねられるからである。この物質性が意味をパロールの身体性から解放し、言述を肉的な包みから自由にする。」(CH 36 f.)[23]

リクール自身が認めているくらいであるから、彼の精神性概念はガダマーに由来することは疑いない。しかし、両者に違いがあることにも気をつけなければならない。ガダマーでは精神性は意識の自由、主観の自律性を意味しているのに対し、リクールでは物質性に対する精神性、理念性を意味している。

リクールは七〇年代初頭にガダマーから大きな影響を受けた。しかしながら、その結果変貌を遂げたのは外面ばかりで、リクール解釈学の核心部分には何ら変更がなかった。そもそも影響を受けたということは、影響を与えたものとまったく同じものが生じたということではない。特に、リクールのように、それ以前に自己の哲学を形成している者への影響はそうである。影響者と被影響者という二つのものが融合し合って新しい第三のものが生み出される。ガダマー理解という観点に限定して言うと、リクールのガダマー受容は、ほとんどの場合、誤解に基づいている。リクールは意味論的自律の根拠をガダマーとは別の仕方で考えているし、精神性や世界、地平融合(Horizontverschmelzung)[24]といった概念の理解も正確とは言えない。

以上の議論をまとめておこう。

六〇年代末にリクールはエクリチュールに対する評価を逆転さ

せ、七〇年にはエクリチュールによって定義されたテキスト概念を自身の解釈学の中心に置く。六〇年代半ばまでは、リクールにとってエクリチュールとパロールの違いはあまり重要ではなかったが、あるいは、両者の区別が問題のところでも、エクリチュールは暗にパロールに対して軽視されていた。ところが、デリダの刺激でリクールは、エクリチュールに対するそれまでの評価を改める。エクリチュールはパロールと対等の言語形式とされ、更に、ガダマーの影響でエクリチュールの持つ積極的な側面が展開されるようになった。

<略号表>

ガダマーの著作集第一巻からの引用は略号を付けずに頁数のみを記す。cf. Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke*, Bd. 1. Hermeneutik I (*Wahrheit und Methode*), Tübingen, J.C.B. Mohr, 1986. リクールの著作は以下の略号を用いて示す。なお、ガダマー、リクールとも引用文中の傍点はすべて引用者による。

CCM 'Du conflit à la convergence des méthodes en exégèse biblique' *Exégèse et herméneutique*, éd. par X. Léon-Dufour, Paris, 1971; pp. 35-53.

CH *Cours sur l'herméneutique*, Louvain, Institut Supérieur de Philosophie, 1971-2.

CHE 'Le conflit des herméneutiques: épistémologie des interprétations' *Cahiers internationaux de symbolisme* 1(1963): 152-184.

CR 'La critique de la religion' *Bulletin du Centre Protestant d'Études* 16 (1964): 5-15.

CRT 'Contribution d'une réflexion sur le langage à une théologie de la parole' *Revue de théologie et de philosophie* 18 (1968): 333-348.

DI *De l'interprétation: Essai sur Freud*, Paris, Seuil, 1965.

ECE 'Esquisse de conclusion' *Exégèse et herméneutique*, éd. par X. Léon-Dufour, Paris, 1971; pp. 285-295.

EH 'Existence et herméneutique' *Interpretation der Welt*, hrsg. von H. Kuhn, H. Kahlefeld und K. Forste; Würzburg; Im Echter-Verlag; 1965; S. 32-51.

EPE 'L'événement de la parole chez Ebeling' *Cahiers du Centre Protestant de l'Ouest* 9(1968): 23-31.

ES 'Événement et sens' *Révélation et histoire: La théologie de l'histoire*, Paris, Aubier, 1971: pp. 15-34.

ESD 'Événement et sens dans le discours' *Paul Ricœur ou la liberté selon l'espérance* éd. par M. Philibert, Paris, Seghers, 1971; pp. 177-187.

HIR 'Herméneutique de l'idée de Révélation' *La révélation*, Bruxelles, Facultés universitaires Saint-Louis, 1977; pp. 15-55.

HPH 'Histoire de la philosophie et historicité' *L'histoire et ses interprétations: Entretien autour de Arnold Toynbee*, éd. par Raymond Aron, Paris/La Haye, Mouton, 1961; pp. 214-234.

IT *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, Fort Worth, The Texas Christian University Press, 1976.

MPB 'Mythe et proclamation chez R. Bultmann' *Les Cahiers du Centre Protestant de l'Ouest* 8(1966) : 21–33.

MPH 'La métaphore et le problème central de l'herméneutique' *Revue philosophique de Louvain* 70(1972) : 93–112.

MT 'The Model of the Text: Meaningful Action Considered as a Text' *Social Research* 38(1971) : 529–562.

MV *La métaphore vive*, Paris, Seuil, 1975.

PB 'Préface à Bultmann' *Le conflit des interprétations: Essais d'hérméneutique*, Paris, Seuil, 1969 ; pp. 373–392.

PDS 'Le problème du 'double'-sens comme problème herméneutique et comme problème sémantique' *Cahiers internationaux de symbolisme* 12(1966) : 58–71.

PI 'Problèmes actuels de l'interprétation' *Centre Protestant d'Étude et de Documentation* 148(1970) : 163–682.

PLC 'Les problèmes du langage' *Cahiers de philosophie* 1 (1966) : 27–41.

PLK 'Philosophie et langage' *Contemporary Philosophy: A Survey*, vol. 3, ed. by R. Klibansky, Firenze, La nuova Italia Editrice, 1969 ; pp. 272–295.

PLR 'Philosophie et langage' *Revue philosophique de la France et de l' Étranger* 103(1978) : 449–463.

QS 'La question du sujet : Le défi de la sémiologie' *Le conflit des interprétations: Essais d'herméneutique*, Paris, Seuil, 1969 : pp. 233–262.

QT 'Qu'est-ce qu'un texte: Expliquer et comprendre, *Hermeneutik und Dialektik*; hrsg. von R. Bubner, K. Cramer und R. Wiehl; Tübingen, Mohr; 1970; S. 181–200.

RB 'R. Bultmann' *Foi-Education* 37(1967) : 17–35.

SDP '《Le symbole donne à penser》' *Esprit* 27 (1959) : 60–76.

SL 'Sens et langage' *Cahiers d'Études du Centre Protestant de Recherche et de Rencontre du Nord* 26(1968) : 38–75.

SM *La symbolique du mal*, Paris, Aubier, 1960.

SEM 'La structure, le mot, l'événement' *Esprit* 35 (1967) : 801–821.

ST 'Symbolique et temporalité' *Archivio di Filisofia* 33 (1963) : 5–42.

TH 'La tâche de l'herméneutique' *Exegesis: Problèmes de méthodes et exercises de lecture*, éd. par Fr. Bovon et Gr. Rouiller, Neuchâtel/Paris, Delachaux et Niestlé, 1975 ; pp. 179–200.

TNT 'Technique et non-technique dans l'interprétation' *Archivio di Filosofia* 34(1964) : 23–50.

注

(1)「言述」と「言葉」が同義であることがわかる箇所としてはHPH 221, SDP 64′「言述」と「言語」についてはCHE 155, 164; CR5; DI57′言語と言葉についてはTNT 30f., DI 477, 482; SM325.

(2) CR15, RB 19–21, MPB 21f., PB 373.

(3) 拙論「〈出来事と意味〉の弁証法と歴史性」〔『倫理学年報(日本倫理学会)』第三九集(一九九〇年)pp. 169–183〕参照。

(4) Peter Kemp, 'Phänomenologie und Hermeneutik in der Philosophie Paul Ricoeurs' *Zeitschrift für Theologie und Kirche* 67(1970): 335–343; S. 347(Korrekturzusazt).

(5)「記号学とグラマトロジー」『ポジション』〔高橋允昭訳′青土社′一九八一年′pp. 27–54〕p. 39.

(6)『根源の彼方に――グラマトロジーについて』〔足立和浩訳′現代思潮社′一九七六年〕上 p. 89. cf.『(同)』p. 16.

(7)『(同)』p. 110, 158–199.

(8) 'la mort de l'écrivain' (*La voix et le phénomène* (cf. 9); p. 104.)

(9) Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, Paris, P.U.F., 1967. *De la grammatologie*, Paris, Minuit, 1967. *L'écriture et la différence*, Paris, Seuil, 1967.

(10)『根源の彼方に』上 p. 12.

(11)『(同)』上 pp. 174–83.

(12) デリダの思想を理解するに当たり以下のものを参照した。高橋哲哉「意味と構造――超越論的アプローチの系譜」『新岩波講座哲学』第一六巻〕岩波書店′一九八六年 pp. 214–246〕Richard Harland, *Superstructuralism: The Philosophy of Structuralism and Post-Structuralism*, London/New York, Methuen, 1987: pp. 124–54. V・デコンブ(高橋允昭訳)『知の最前線――現代フランスの哲学』〔TBSブリタニカ′一九八三年〕pp. 197–243. 高橋允昭「イカロスの道」『デリダの思想圏』〔世界書院′六九八九年 pp. 5–11〕′「ジャック・デリダと私生児性」『(同)』〔p. p. 17–14〕′「Differenz と différance」『(同)』〔PP. 43–70〕′「デリダの現在」『(同)』〔pp. 107–126〕。

(13)『根源の彼方に』 p. 16, 34, 75, 210.「記号学とグラマトロジー」p. 39.

(15)『(同)』上 p. 120f., 112, 125.

(16)『(同)』上 p. 114f.「記号学とグラマトロジー」p. 40.

(17)「根源の彼方に」上 p. 37, 172, 205.

(18) 六一年の「哲学史と歴史性」(HPH)には′実質的にそれに対応する考えが述べられている。作品はそれが産出された社会的・文化的状況を超える(HPH 222)。ただし′これは哲学について言われたものであって′テキスト一般について言われたものではない。

(19) MT 534–7., ES 18–21, ESD 180–3, CCM 48–4.

(20) 拙論「ガダマーとリクール――蓋然性の観点から」〔『哲学・思想論叢(筑波大学哲学思想学会)』第四号(一九八六年)pp. 117–127〕′「ガダマーとリクール――伝統の連続性と解釈の歴

史性」〔『哲学（日本哲学会）』第三九号（一九八九年）pp. 139-150〕。

(21) Mary Gerhart 'Paul Ricoeur's Hermeneutical Theory as Resource for Theological Reflections' *The Thomist* 39 (1975): 496-527; p. 517 (n.37).

(22) Eric Donald Hirsch, *Validity in Interpretation*, New Haven, Yale University Press, 1967; p. 1, 2, 3, 4, 10, 11, 12, 74, 164. cf. p. 123, 249.

(23) ESD 181, 182; MT 535, 536, 537; ES20, 21.

(24) ES 23, ESD 185, MPH 108, IT 93, CH 225 f.

※ 本論文は文部省科学研究費補助金（奨励研究A）による研究成果の一部である。

（まきた・えつろう　筑波大学大学院哲学・思想研究科）